病型分類が困難であった B/Myeloid の形質を有する混合形質性急性白血病の一例

◎原田 雅章[1)]、杉本 莉奈[1)]、鈴木 真生[1)]、大西 千明[1)]、亀山 拓哉[1)]
島田市立総合医療センター[1)]

【はじめに】今回我々は全白血病の 2～5%を占めるまれな疾患である、混合形質性急性白血病（MPAL）を経験したので報告する。【症例】70 歳、男性、風邪を引き体調不良（咳、痰等）ヒリヒリする胸痛が続き近医受診。食欲不振・体重減少（1ヶ月で 5kg 減少）、血液検査にて LDH：3969 U/L、芽球様細胞が 53%出現しており、急性白血病を疑われ血液内科紹介となった。【入院時検査所見】〔血液検査〕WBC 7,000 /μL（芽球 50%）、RBC 4.20×10^{12} /μL、Hb 7.6 g/dL、PLT 125,000 /μL、D-dimer 17.5 μg/mL、LD 4216 U/L であった。〔骨髄検査〕骨髄過形成、M/E 比 70.29、芽球 98%であった。芽球は MPO 染色陰性、N/C 比は 80%以上、核網は繊細、空胞を認める細胞もあった。〔FCM〕陰性：CD2、CD3、CD4、CD5、CD7、CD8、CD10、CD20、CD14、CD33。陽性：CD13、CD34、KORSA、HLA-DR、CD19 であった。染色体：69、XXY、+Y、-3、+6、-7、+8、-9、+10、+13、+14、-15、-17、-18、-20,+21 であった。〔遺伝子検査〕WT1mRNA 140,000 コピー/μgRNA であった。〔骨髄病理所見〕陰性：CD20、CD10、CD3、CD5。陽性：CD19、CD79a、TdT、CD34、BCL2、CD33、CD13 であった。【治療効果判定骨髄検査】骨髄過形成、M/E 比 26.67、芽球 92.4%であった。芽球は MPO 染色陽性、N/C 比は 80%以上、核網は繊細であった。〔FCM〕陰性：CD2、CD3、CD5、CD7、CD8、CD10、CD20、CD13、CD14、CD33、CD117。弱陽性：CD4。陽性：CD19、CD34、KORSA、HLA-DR、MPO、TdT、cyCD79a であった。〔遺伝子検査〕WT1mRNA 91,000 コピー/μgRNA、m-bcr/abl 50 未満コピー/μgRNA であった。【考察】初回骨髄検査の結果からは病型分類が困難であったが 2 回目の骨髄検査時に行った FCM や免疫染色の結果より、B 細胞系、骨髄系の形質を持つ細胞集団を確認できたことから MPAL(B/Myeloid)と診断された。改めて FCM や免疫染色の重要性を認識できた症例であった。

連絡先 0547-35-2111（内線：2203）